

## 体験学習による人間関係論の展開とその考察

### 《はじめに》

大 森 正 樹

すでに本紀要『人間関係』第9号(p.107~145)に相当詳しく授業「人間関係原論」の報告がなされている。この授業は1989年より、約四年にわたるカリキュラム検討の結果、人間関係科のカリキュラムを大幅に手直しをしたのにもなって、必修科目として導入されたものであるが(学生全員に2年間課せられている)、発足よりすでに7年を閲した。当初4人の教員が2年間を1クールとして同じ学年を担当し(当時の教員数では、教員グループは3グループになる)、3年目は休むという形でやってきた。但し、これでは教員グループには変化なく、同じ教員のグループが際限もなく続くということになりかねない。しかしこの7年間に教員の退職に伴って、教員の入れ替わりがあり、加えて、1996年現在では一番目に担当した教員グループは、すでに三度目の最後の年の担当になっている。人間関係原論は人間関係科の授業のうちで最も基本的で、中核的なものと考えられており(即ち、紀要第九号によれば、人間関係原論は、人間関係とは何か、人間関係を学ぶとはそもそもどのような意味があるのかという人間関係の学習における原理的な問題に取り組む科目だからである)、今、この3グループ全体の授業記録を残しておくことは、この授業の存在理由を吟味するためにも、また人間関係科の授業を作り上げていく上での指標としても意味があることと思う。そこで人間関係原論にまつわる原理的な問題とともに、すでに報告されている第一グループのものは除いて、残りの第二、第三グループ(1990~1995年)の授業記録を合わせて掲載することにした。その際、表現の形式は各グループの裁量に委ね、特に統一した形にはしていない。それぞれの担当グループの持ち味を出すためである。

また人間関係原論の原理的な考察は、既に紀要第9号にかなり詳細に（但しそれは担当した四人の考えであると断った上で）述べられているので、その方を参照していただきたい。しかし大筋としては、原論というのは、人間関係科カリキュラム構成上の基礎科目としての「人間関係科」の「原論」であり、かつまたより根源的な「人間関係」の「原論」でもあるという認識は共通していると思われる。また一回一回授業を組み立てていくという方法も、共通している。それはその時の学生の関心事や時代の問題を反映させるということであり、学生の現状をふまえた上で、是非教員スタッフが伝えたい事を現実の授業の中に織り込んでいくという試みでもあるわけである。担当スタッフが異なれば、自ずからその授業内容も異なってくるが、しかしやはり共通した問題意識は、「個」であるということと「集団」ないし「共にある」ことをどう両立させていくかにあると思われる。その過程において、「人間らしさ」とは何かといったような問題の考察から「人間であること」を探っていこうとする方向が垣間みられるのである。そうしたスタッフの試みがどのように学生の中に浸透し、血となり、肉となって結実していったかを知ることは、恐らくまだまだ先のことであろうけれども。

そこで以下、「体験学習による人間関係論の展開と考察」というテーマのもとに、授業という経験を土台としながら、人間関係論の展開を試みる論文と、実際の授業記録をあわせて掲載し、多方面からの批判をおおぐ材料としてみたい。